

## 自由図書館の部 佳作

### 伊勢村咲記さん 文学部日本文学科2年

『朝のガスパール』 筒井康隆著 / 新潮社

#### 「僕らの世界が誰かの為の御伽話でないと誰が言った？」

SFの名手、筒井康隆はとうとう私たちの暮らす世界まで懐疑の槍を向けたらしい。

この本、『朝のガスパール』は1991年10月18日から1992年3月31日まで、朝日新聞の紙面で繰り広げられた連載小説を一冊にした本である。

連載は少しずつ日々物語が展開していくが、それによって読者の声というものが作者の耳に入る余地が生まれた。この本は、作者と読者が投書や当時普及し始めたパソコン通信（インターネットエクスプローラの前身）の掲示板などで意見や感想を出し合い生み出された奇怪な作品である。

当初彼が得意とするSF路線で始まった物語は、貴重な読者のお声により現代的な中流階級のマダム達のサロンの話に変わる。その展開が好評になればそのシーンが続き、読者が飽きて変更を求めたり議論が起こるとそれに応じてそれを描く作家が頭を抱え出す。これを描き出す様を読み進め追ううちに、私たち読者は、“読者の声”によって作品の世界にいつの間にか参加している。そうして振り返ると、私達の世界で物語を書く筒井康隆と、作中の筒井康隆と、さらに描かれる作家、マダム達のサロンのある世界、その世界の中の人物がするゲームのSF……と、この本ひとつで私たち読者は六重もの世界を認識する。その時に背に走る、誰かに覗き込まれている視線に気がついたときの違和感は、凄まじいものである。

その違和感は、私たちの世界への懐疑を読者に抱かせる。

私たちの生活するこの世界が、もし、誰かの書いた物語であったなら？

私たちが誰かのための舞台の一装置かもしれないという懐疑は、熟練した筒井康隆の技量溢れる筆致と、軽やかで軽妙な語りでしか感じられない、素晴らしき《職人芸》である。生涯に一度、怖いもの見たさでマッターホルンから紐無しバンジージャンプするつもりで構わない。

懐疑だ世界だと大袈裟に並べやがって、と思うならば、怪文『朝のガスパール』というタイトルの意味を探すつもりで一度読んでみてほしい。決してピアノ曲の、夜のガスパールではない。筒井的なキレの良い言及を用いた、タイトルという行為そのものへの問いかけであるのだろう。

物語に影響を及ぼした読者との全通信記録は『電腦筒井線—朝のガスパール・セッション—』（全三巻）にまとめられている。興味があれば併せて読んでみてほしい。きっとこの本という山頂から眺めた景色を知る者ならば、裏舞台をこっそり覗き見るような感覚が、きっと読者をぞくぞくとさせてくれるだろうから。